重文札幌農学校第2農場農機類標本台帳

一般名称: 耕耘機・歩行式トラクタ	現地の通称: シマールロータリ耕耘機

資料種別: ◉製品-実物 ○製品-レプリカ ○製品-模型 ○製品図面 ○写真等 ○図書掲載 ○その他

資料種類: 動力・分野
- ☐ 人力用具 ☐ 耕起前器具 ☐ 管理防除 ☐ 貯蔵関連
- ☐ 畜力用具 ☒ 耕耘用具 ☐ 収穫機 ☐ 施設類
- ☐ 原動機具 ☐ 整地用具 ☐ 調製機器 ☐ 機素
- ☒ トラクタ用機 ☐ 施肥播種 ☐ 加工機器 ☐ その他

管理プレートNo. 牝牛舎101

台帳No.

製作者・会社: SIMAR社　　製造市・国名 イタリアGeneve

製造年_購入年,標本収集年:

使用目的・使用方法等

動力機＋耕起作業機
本機は、写真下３番目の全体図ようであるが、エンジンが外され、さらにロータリーカバーもない。探せ！

利用経過_収集記録_意義等

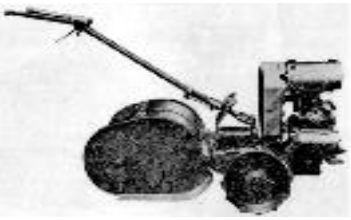
日本では、社名イタリア語の最後のRが発音できず国内文献ではシーマ、シマー等と呼んだが、シマールに統一した。これは、1920（大正9）年頃に輸入が始まった「ビーマン（USA、野沢組輸入、¥1700)、ユーチリター（USA,大阪杉山・東京柏陽社輸入、¥1700）、それに圧倒的な台数を入れたシマール（大阪双益商会輸入、¥1900）が日本に紹介された最古のロータリである。
SIMARの語源は、下記ラベルにある「SOCIETE INDUSTRIELE DE MACHINES AGRICOLES ROTATIVES」によると想像

仕様書_解説等

Belt-Power:7 Ps、2 Cyl. Piston: 3 in x 3.5 in、1922年農商務省性能試験（於東京府立農事試験場）では燃料消費：ガソリン2.2L/h、作業能率は耕浸12cm・耕幅60cmで11a/h、石川県農試の試算では、2.11円/10aという。(詳しくは水野夏一著「農業動力及改良農具」参照)

右に全体図

外観特色関連図等



資料の所在

牝牛舎

資料への特記事項

資料管理経過

作業メモ・上掲欄の超過文追記

日本型耕耘機への発展＝1923年頃から，岡山・児島湾干拓地で藤井等により，シマール式に範をとった耕うん機の試作研究が始まり，1935年迄に幾通りかの実用的機構を開発した。クランク式は、多数の爪をクランク機構で順次土中に刺し，後方に跳ね飛ばす構造であり、製品化して相当数が販売された。スクリュー耕耘機は別頁展示品参照。最後に一人勝ちするロータリ式は、所要動力が少なくてワラの絡まない耕耘刃の形態が未解決で製品化が遅れたが、遂に昭和26年ごろ完成し、国の助成策もあって昭和32年ごろに全国の水田が耕耘機で耕されるまで普及した。

台帳管理番号